

## 「第二期グローバル化」論について

伊豆 久

はじめに

グローバル化をめぐる議論に、最近、歴史派ともいべき新しいタイプのものが現れ始めた。これまでの議論は、グローバル化は世界の経済効率を高めているかあるいは逆に貧富の格差を拡大しているのか、また、グローバルスタンダードにもとづくクローニーキャピタリズムの是正なのか、アメリカンスタンダードの一方的な強制なのか、など、直接的にその是非を問うものが中心であった。

そうした議論とは別に、あるいはそうしたグローバル化の功罪を論じる前に、歴史的視点からグローバル化を捉え返すことが必要なのではないか、といった主張である。ここでは、グローバル化は経済の発展にともなう二〇世紀末固有の現象というより、資本主義のもとで反復される循環的な現象として捉えられている。具体的には、一九世紀末にも今日に匹敵するグローバル化があったとし、それを現在のグローバル化と比較することから、グローバル化の歴史的性格を探ろうとする試みである。そうした議論によれば、現在のグローバル化は、一九世紀末に続く二回目のグローバル化ということになる。以下、国際資本市場に関連する部分の簡単な紹介をおこなうこととしよう。

# 1 「歴史的観点から見たグローバル化」

米国経済調査局（NBER）は、昨年五月、「歴史的観点から見たグローバル化」と題するシンポジウムを開催、そこでは、一九世紀末のいわゆる国際金本位制下におけるカネ（資本）、モノ（財）、ヒト（労働）の国際的移動を今日のグローバル化と比較するさまざまな議論が展開された。<sup>(1)</sup>そして、今年八月には、IMFが同じタイトルで同様のシンポジウムを開催している。<sup>(2)</sup>

これらはいずれも、先に述べたように、グローバル化の是非を直接問うというよりも、あるいはそのために不可欠な準備作業として、グローバル化を歴史的観点から問い直そうというものである。この二つのシンポジウムの中から、国際資本市場のグローバル化を扱ったオプズフェルドとテイラーの報告を見てみよう。<sup>(3)</sup>

二人は、まず一八七〇年代から今日に至る国際資本市場の歴史を四つの時代に区分する。一九一四年以前の国際金本位制の時代、一九一四年から四五年までの二つの世界大戦と大恐慌の時代、四五年から七一年までのIMF体制の時代、一九七〇年代から今日までの活発な資本移動と変動相場制の時代、である。

その上で、国際的な資本取引額の大きさや投資収益率の均等化などを基準に各期におけるグローバル化の進捗度を検証し、グローバル化が進んだのは国際金本位制期と現在の二つの時期であり、その間には、大戦間期とIMF体制期という停滞期があったことを指摘している。すなわち、ここ百年余りを見てみると、第一に、世界の資本市場の歴史は、一方にグローバル化へと発展してきたのではない、第二に、一九世紀末にすでにかなりのグローバル化が進んでいたにもかかわらず、それは第一次大戦と大恐慌によって崩壊し、その後五〇年という長い停滞期を経て最近復活した、すなわちU字型の現象だ、というわけである（図1参照）。

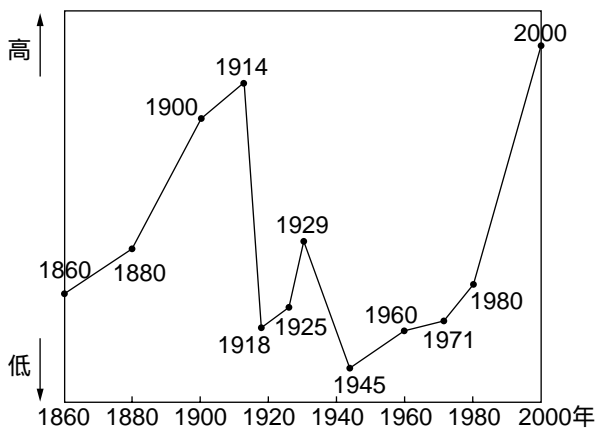
では、国際資本市場のグローバル化がこうした歴史をたどってきたのはなぜか。二人は、有名な国際マクロ経

済上のトリレンマ論を採用して説明する。すなわち、鼎立不可能な三つの要素（自由な資本移動、固定相場制度、自立的な金融政策）のうち、どれが選択され、どれが放棄されたか、が国際資本市場の性格を決定するというわけである。たとえば、第一次大戦前の国際金本位制のもとでは、各国独自の金融政策が放棄されることで、自由な資本移動と固定相場制度が実現されていた。国内均衡を犠牲にした国際均衡の実現である。しかしながら、国際金本位制は第一次大戦によって崩壊し、また、大恐慌を経験した資本主義のもとでは国内均衡の軽視は許されなかった。そのため、第二次大戦後のIMF体制の下では、自由な資本移動は戦間期同様大幅に規制され、その一方で管理通貨制度のもとでの自立的な金融政策と固定相場制度が維持されたのである。しかし、再び資本主義が大きく動揺した一九七〇年代には、固定相場制度が崩壊（ニクソンショック）すると同時に世界的な資本移動の拡大が生じ、一九世紀末に続く第二期グローバル化が始まったというわけである。

## 2 IMFとグローバル化

もちろん、以上のような議論は極めて粗雑なものであるが、その一方で、その単純な主張が興味深い様々な論

グローバル化の進展度（イメージ図）



(出所) M. Obstfeld and A. Taylor, Globalization and Capital Markets.

点を示唆していることも否定できない。

第一に、先にも述べたように、グローバル化を、輸送・通信コストの低下などの技術進歩や経済発展にともなう、一方向的かつ不可逆的な現象とする見方を否定していることである。確かに、第一次大戦前のグローバル化においても、大西洋海底ケーブルの敷設（一八五八年）に象徴されるような通信や海運における技術革新が大きな役割を果たしたことは間違いない。今日のグローバル化における情報通信技術の影響については改めて述べるまでもないであろう。しかし、それならば、混乱の続いた大戦間期はあくとしてもIMF体制期においても国際資本市場が低迷したままであったのはなぜだろうか。その間技術進歩が停滞していたわけではなく、世界のGDP成長率は、一九世紀末をはるかに上回る水準にあった。にもかかわらず一九五〇・六〇年代の国際資本市場の発達はごく限られたものにすぎなかった（この時期に誕生したユーロ市場もその本格的な成長は七〇年代を待たねばならなかった）。グローバル化の進展や停滞は、経済一般や技術の発達には解消できない、（トリレンマ論が指摘する）政策選択の問題であり、その選択を規定した国際政治経済状況によると言わざるをえないのである。

第二に、第二次大戦後から一九七一年までのいわゆるIMF体制に対する新しい解釈である。IMF体制は、周知のように金とドルの二つを中心としており、金本位制的性格とドル本位制的性格を併せもっていた。前者に着目すれば、第一次大戦前の国際金本位制と似た国際均衡の重視を各国に要請するシステムであったと言える（その例として日本における国際収支の天井など）、同時に後者を重視すればひとり国際収支の制約を免れた米国を中心とする性格が浮かびあがり（六〇年代末からの国際収支赤字の無視 いわゆるピナインニグレクト政策）七〇年代以降との連続性が指摘できる。

しかしながら、オブズフェルドらのU字型論によれば、IMF体制期は、国際金本位制期とも現在の変動相場

制期とも大きく異なる時代だったということになる。なぜならそこでは、グローバル化やそれを支える経済的自由主義（レッセフェール）が厳しく抑圧された、資本主義においてはむしろ特異な時代だったからである。すなわちIMF体制期は、今日の自由金融時代の幼年期というよりも、大恐慌が世界を覆っていた一九三〇年代の金融規制やそれをリードしたニューデールの後継として把握されるのである。

IMF体制と一九三〇年代の連続性を強調することには違和感があるかもしれない。IMFは、各国に対外金融取引の自由化を求める機関として創設されたからである。しかし、IMFの求める自由化が経常取引に限定されており、資本取引に関しては各国の裁量に委ねられていたことを忘れてはならない。また、ニューデール以降の経済政策もIMFも、ともにケインズの経済学を母胎としていることを再確認すべきであろう。IMFの創設過程は、英国代表のケインズと米国代表のホワイトの対立を軸に描かれることが多いが、ホワイトもまたケインズンであったことを軽視すべきではない。国際的な資本取引が活発におこなわれるもとは、一国単位の金融財政政策は有効に機能しない。だからこそ、資本移動に関する規制を認めることは英米双方において当然の出発点だったのである。

第三に、だとすれば、現在のグローバル化の始まりは、IMF体制ではなく、その崩壊にこそ求めざるをえないことになる。その点はどう考えるべきなのだろうか。これまでの通説的な理解では、今日の国際金融システムは変動相場制であり、それは七一年のニクソンショックを画期として誕生した、ということになる。しかし、本稿で述べてきた見方からするとそれでは不十分である。七〇年代が移行期であることは共通するが、国際資本移動に視点を据えて、その抑圧低迷期から促進成長期への転換点として七〇年代を捉える必要があるからである。

IMF体制の下で国際的資本移動が抑制されていたのは、すでに述べた理由の他、イギリスがポンドの信認を喪失して資本輸出国たりえなくなる一方で、アメリカは潜在的な資本供給能力は備えつつも民間金融機関が大恐慌の影響から立ち直れていないという事情があつたからである。そして、このことが国際資本市場が奇妙な形で復活する原因ともなる。すなわち英米二国がそれぞれの優位を活かそうとした結果、イギリスはポンドによらない国際金融市场シティの復活を、アメリカは自国金融機関によらないドルの国際化を図つたのである。それが、英系銀行の扱うドル預金として始まつたユーロ市場に他ならない。ここから今日につながるグローバル化が始まつたのである。

もちろん、ここからのユーロ市場の発達、そこから玉突き式に世界に広がる金融自由化の過程は、すでに多くの論者によって説明されてきたところである。ただ、そうした国際銀行業・国際資本市場の発達を現代の国際金融システムの一環として理解することは、これまで必ずしも十分にはなされてこなかつたのではないだろうか。一方では変動相場制の時代として捉えられる現代の国際金融を国際的な資本市場の拡大と重ねて捉えること、オプズフェルドらのU字型グローバル化論、第二期グローバル化論は、それを求めているように思われる。

### 3 グローバル化と大恐慌

そして、第四に、前回のグローバル化（国際金本位制）が、第一次大戦や再建金本位制をはさんで、結局は大恐慌という形で崩壊したのと同様に、今日のグローバル化も、大恐慌に行き着くのか、という問題が残る。オプズフェルドらはこの点に触れていないが、上記NERのシンポジウムにも参加した国際金融史家ハロルド・ジームズは、昨年『グローバルバリエーションの終焉』<sup>(4)</sup>を出版、現在のグローバル化に警鐘を鳴らした。というのも、

この本のいうグローバル化は一九世紀後半からの「第一期」グローバル化のことであり、その「終焉」とは一九二九年からの大恐慌を指しているからである。すなわち、行き過ぎたグローバル化は、新しい不平等を生み出すシヨナルな反発を引き起こす。それが、貿易、金融、移民などの国際経済取引を縮小させて大恐慌を生み出すのである。大戦間期に見られた保護貿易主義や為替管理に代表される反グローバル化・ナシヨナリズムも、その起源は、(これまでの通説がいうような)第一次大戦後の経済状況の変化や二九年の株価暴落以降ではなく、一九世紀末のグローバル化の時代に求められる。これがジエームズの描く大恐慌論である。

現在の、すなわち「第二期グローバル化」も同じ道をたどるのだろうか。確かに、ここ数年、グローバル化には各方面から強い批判が浴びせられてきた。シアトルでの反WTOデモ、九七年のアジア危機や九八年のヘッジファンド危機以降高まっている国際的資本取引への非難の声。その一方で、米国には、世界全体の経済や政治の安定を目指すというより、直接的に自国の利益を求める行動が目立ってきた。こうした状況が、二〇〇〇年春以降のITバブルの崩壊と重なって、一九三〇年代との連想を引き起こしているのである。

おわりに

小稿で紹介した二つの論考は、その問題関心は鮮明であるが、その一方でその論旨や実証に議論の余地が残っていることも否定できない。

しかしながら、現代世界を大きく変えたグローバル化を、歴史的観点から再検討することの意義は小さくなく、さらなる議論の深まりが期待されている。

注

- ( 1 ) NORRONEN, J. (Globalization in Historical Perspective) の註釋を <http://www.nber.org/books/global/index.html>を参照。
- ( 2 ) ILOのシンポジウムの註釋を <http://www.imf.org/external/pubs/ft/seminar/2002/global/eng/index.html>を参照。
- ( 3 ) Maurice Obstfeld and Alan Taylor, Globalization and Capital Markets (共一参照)
- ( 4 ) 『ケローバリゼーションの終焉』 日本経済新聞社 二〇〇一年 (Harold James, *The End of Globalization*, Harvard University Press, 2001)

( 2 ) わたし・密蔵研究蔵)